2024年 2月 2日付「茨城新聞」掲載

小林、エースの自覚

常総学院 センバツに挑む 下

投手

2本目の柱、成長が鍵

常総学院のエース右腕・小林＝2023年10月23日、栃木県総合運動公園野球場

県大会（5試合）は5人の投手が登板し、チーム防御率は0・73。その核を担ったのがエースとして頭角を現した小林芯汰（2年）だ。県大会は4試合で23回を投げ、30奪三振、1失点。140キロ台後半の直球を武器に、相手打線をねじ伏せた。

新チームとなり、背番号「11」から「1」を託された小林。捕手の片岡陸斗（同）は新エースの変化を感じ取っていた。地区大会はサヨナラ勝ちした初戦で九回に勝ち越しを許すなど不安定さがあった。県大会準々決勝の水城戦。先発した小林は8回3安打無失点。一～四回まで三者凡退に抑えると、2点リードで迎えた七回、1死満塁の窮地を併殺打で切り抜けた。続く八回は再び3人で抑え、この回裏に一挙に5点を奪ってコールド勝ち。片岡は「受けていて、俺が抑えてやるという気持ちが伝わってきた」と振り返り、「マウンドで小さくなるところがあったが、変わった」と立ち振る舞いの変化を語った。

しかし、甲子園で勝ち上がっていくために、投手力の向上は必至。投手陣は制球力が課題だ。県大会決勝で露呈した。先発の大川慧（同）が先頭に4球続けてボール。その後も制球が定まらず、投手交代が続いた。九回まで無失点でしのいだものの、5人で8四死球を記録した。

関東大会では、斎藤一磨（同）が3試合にリリーフ登板し、計8回を自責点0に抑えた。「手応えを得た」（斎藤）ことは好材料だが、小林に続く柱の育成は急務だ。関東大会後は各自が球種を増やしたり、課題と向き合ってきた。センバツまで残り1カ月半。エース小林は「負けない投手になる」と気合十分。斎藤も「全国制覇に貢献できる投手になる」とさらなる成長を誓った。

（この連載は関口沙弥加が担当しました）

関東大会で3試合にリリーフ登板し、計8回を自責点0に抑えた常総学院の斎藤＝2023年10月28日、栃木県総合運動公園野球場